

Plutonium

Winter 2002 No.36



オピニオン

核問題のための包括的戦略を考える時期にきた
アメリカのABM条約脱退を機に

Series Plutonium

六ヶ所MOX燃料工場の建設計画

Nourriture

自然と共生への讃歌

社団法人 原子燃料政策研究会

Plutonium

Winter 2002 No.36

オピニオン	1
核問題のための包括的戦略を考える時期に来た アメリカのABM条約脱退を機に	
取材レポート	2
お年寄りと若者が元気に暮らせる町に 青山 善太郎 鹿島町長インタビュー	
Nourriture-14	8
自然と共生への讃歌	津島 雄二
Series Plutonium 20	11
六ヶ所MOX燃料工場の建設計画	佐々木 正 米田 守宏
冥王星 ³⁴	18
私のエネルギー史断片(その二) 「有澤さんと沼さんと」	後藤 茂

Plutonium は、インターネットで日本語版、英語版がご覧になれます。

ホームページ  <http://www.cnfc.or.jp/>

e-mail  pu-info@cnfc.or.jp/



ブリュッセル市内の一角

ベルギーは、1962年に1万kWの試験的な原子力発電所(BR-3)の運転を開始し以来、現在では7基の原子力発電所により、総発電電力量の56.8%(2000年実績)を賅うに至っており、原子力発電に対して先駆者的な役割を欧州の中で果たしてきました。しかし残念ながら、他の欧州諸国のご多分にもれず、緑の党の入閣により、原子力発電に対する見直しが行われています。連立政権の政治的判断は、自国の将来のエネルギー政策より、明日の党利党略に走り勝ちのような気がしてなりません。

核問題のための包括的戦略を考える時期に来た

アメリカのABM条約脱退を機に

アメリカは、昨年12月13日に弾道弾迎撃ミサイル（ABM）制限条約からの脱退を表明した。ブッシュ大統領は、「ABM条約を署名した時代と現在は全く状況が異なる」とし、「ABM条約は、テロリストや、ならず者国家による攻撃から自国民を守る能力を開発するのに妨げになる」と声明を出している。

30年前の1972年にアメリカと旧ソ連の間で署名されたABM条約の意味が、時代とともに変わってきていることは理解できる。しかしABM条約が役目を果たさなくなることによって、どのような戦略的構造ができあがるのか。ABMが複数箇所に配置されることにより、攻撃してきた核ミサイルを打ち落とすことができ、それにより核兵器が意味のないものになるという考え方もある。その一方でその防衛システムに対抗するために核兵器が増強され、核軍拡競争がまたさらに進むという危険性もある。核抑止という冷戦構造下での考え方が変わり、核兵器は増強も防衛も必要という核軍拡に陥る考え方も生じてくるかもしれない。

確かに、テロリストやならず者国家がもし核兵器を持った場合、そこからの攻撃に備えるため自国を防衛するための方策を講じることは必要であろう。しかし、このテロやならず者国家レベルの対策と、核超大国同士による核兵器に関する規制の約束を放棄することを、同じ土俵で考えることが果たして自国の防衛、ひろくは世界平和へ向けた方策を講じるために有効なのかどうか疑問である。

究極的にはテロの撲滅と、ならず者

国家の民主化、国際社会への参入のために努力を続けなくてはならないが、「テロリストやならず者国家が核兵器を使う可能性のための対策」よりも先に、そのような組織に核物質や核兵器技術などを渡さないようにする国際的な、国内的な取り組みが必要であり、そのために早急に核保有国間の話し合い、協力を先行させることが欠かせないのではなかろうか。

米口は、2001年11月に開催された首脳会談において、戦略核兵器を今後10年間でそれぞれ現在の3分の1に削減することを表明し、1月から検討にはいることになっている。現在保有している戦略核兵器約6,000発をアメリカは1,700~2,200発に、ロシアは1,500~2,200発に削減するとしている。しかし過去の戦略兵器削減条約（START）交渉、議会の批准などの遅れにも見られるように、核兵器削減は早急に具体化はできないという現実を伴う。例えばこの削減が正式に合意されたとしても、ロシアの経済的状況から現実的に約束通りの削減が実施できるのかという問題が残ってしまう。また戦略核兵器の数を削減しても、兵器の高度化を進めれば、脅威が減ることにはならず、削減だけでは何ら意味がなくなる。

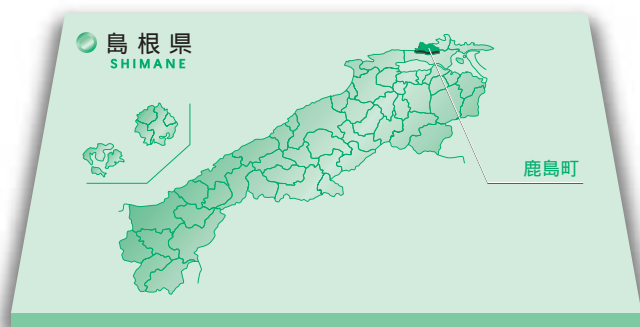
1月8日付のワシントンポスト紙の記事によれば、ブッシュ政権は1年あるいは2年以内に地下核実験の再開に踏み切ることを議会に提示するという。その理由は、ABM条約脱退と差違はない。アメリカの地下核実験が再開されれば、当然、包括的核実験禁止条約（CTBT）

は死文化される。その結果、それをきっかけとして、口実として、ロシア、中国、フランス、さらにインド、パキスタンの核実験、核開発に拍車がかかることは目に見えるようだ。

一方で防衛システムを強化し、一方で核兵器を削減、一方で核兵器を高度化するという動きが、世界の平和のためにプラスになるのかマイナスになるのか、現時点では誰も判らない。また、世界の核兵器問題を、一人勝ちのアメリカに先行させ、結果的に任せてしまっている現状でいいのかどうか、人類全体の生存がかかっているだけに懸念が残る。

従来からの核兵器に関する条約には、核兵器大国である米口のSTARTやABM条約などの2国間条約、核不拡散条約（NPT）、包括的核実験禁止条約（CTBT）をはじめとする多国間条約、非核地帯条約などの地域条約があるが、いずれも目的の異なる個別の条約である。私どもとしては、アメリカのABM条約の脱退、地下核実験の再開提示を、核軍縮、核不拡散など諸問題を世界規模で総合的に検討するための良い機会としたい。従来の個別の条約にこだわらず、地球的規模での包括的安全保障を前向きに考えていくため、核兵器国同士、非核兵器国同士、各地域、そして世界規模での意見交換、討論を経て、21世紀の国際社会にふさわしい提案と結論を導き出す努力を各国に求めたい。

（編集長）



お年寄りと若者が 元気に暮らせる町に

青山 善太郎 鹿島町長インタビュー



島根県鹿島町では、中国電力（株）島根原子力発電所3号機の増設が計画されています。2号機の増設時には住民の方々の反対も大きかっただけに、関係者のご苦労もまた大きかったところです。今回、3号機の増設計画に期待する青山町長にお話を伺いました（11月20日）

（編集部）

神々のサミットの町

はじめに、鹿島町がどのような町なのかご紹介いただければと思います。

【青山町長】私どもが鹿島町の紹介をするときは、まず第一に非常に歴史があって古い町だということです。その中で具体的な一つは佐太神社がこの近くにあり、分かりやすい言葉で言えば、旧暦の10月は一般的に「神無月」といいますが、出雲地方だけは「神在月」と言うのです。その時期に全国の八百万の神様がここへ集まって、今様に言えば、「神々のサミット」が開かれるのです。この佐太神社は、そのサミットの大会場といわれているのです。そういうような古い言い伝えがあるぐらい非常に歴史があります。

最近、福祉関係の事業を始めるために土地の造成をしようとしたら、日本で最古の木棺、木の棺桶が発掘されましたが、そのように非常に古くから食べ物、水などが豊富だったようで、

どこを掘ってもいろいろな文化財が出てきます。ですから非常に歴史のある町だということです。第二に、原子力発電所があるところはどこでも共通ですが、山とか海、川、そういう自然に非常に恵まれているということです。代表的なものとしては、古くからこの海水浴場がこの近辺では有名です。

それからもう一つの特色は、県庁所在地の松江市に非常に近い、隣接しているということもあるのですが、都市の集積機能というのか、文化とか教育とか医療とか福祉とか就業など、松江市の都市機能を非常に受益している町です。したがって、公共施設にしろできるだけ松江市と重複することのないようにして、松江市の施設も活用するといえますか、利用させていただいています。

また、鹿島町は自然に恵まれていますから第一次産業がさかんです。特に漁業はピーク時の水揚げが7万トン、50億円ぐらいの取り扱いがありました、今は落ち込んでいます。しかしこの町

には、島根県では3番目の規模を誇った漁港があります。そのように鹿島町は、生鮮食品の供給基地という位置づけもできると思います。

さらに、中国地方唯一の原子力発電所の町ということになるだろうと思います。ですから、一言で言えば、私たちの町は古代の灯（ともしび）と現代の灯（あかり）が同居した、融和した町だという言い方をしています。

積み残しの振興を3号機建設の機会に

いま、島根3号機の増設計画が進んでいますが、町として3号機の建設に期待していることがありますか。

【青山町長】1号機が46万kW、2号機が82万kWで、1号機が昭和49年3月、2号機が平成元年2月に営業運転を開始しましたが、1号機るときは電源三法交付金制度がその翌年からできたため、その対象にならなかったわけです。もっとも、そのころ町は総合的に社会資本の整備が遅れており、一次産業が基幹産業でしたので、1号機では目に見えらるような町の整備、地域振興というのはできなかったのです。ただ、そのときは初めてのことで、バラ色の期待感がありました。それが裏返しになって、2号機るときにはその反動が来りました。

2号機の計画が持ち上がった当時は、

世の中で公害関係の運動が非常に盛んであったときで、成田空港反対運動が一番のピークではなかったかと思うのです。ここでも第一次の公開ヒアリングでは、鹿島町の人口が倍になったぐらい、方々から人が来られた。その時分にちょうど町議会議員の選挙がありまして、反対で立候補された方は「温排水に手をつければやけどをする」とか、「核燃料のプールが屋外にあって、雨が降ったらそれがあふれて放射能が漏れる」とか、そういうことを堂々と選挙運動で言われる。したがって、漁業関係も猛烈に反対したのです。私は当時、組合長をしていまして、組合員の80%が反対で、反対署名をしまして、私にも「組合長、反対しろ」というような状況で、原子力を取り巻く環境が非常に厳しい時代だったのです。

議会で原発の話になると、対象地域が全員、地域を挙げて反対で、議場を取り囲んだり、機動隊を入れてそれを排除したり、そういうような時代でした。しかしながら、最終的には関係者皆さん方の努力が実って、平成元年に2号機の営業運転が開始になり、それで地域振興が一気に進みました。生活関連、教育、地場産業、いわゆる社会資本の整備が進み、もちろん県内ではトップレベルの整備ができました。ただ、それでも不足のものが相当ありますので、3号機の時には不足している分の整備をいま期待して地域振興計画の中に盛り込んでいるということです。

具体的には、行政としては計画的に進めなくてはなりませんので、第4次の総合計画でいまままで進めてきました。それが平成12年で終わり、今年（平成13年）からまた10年間の総合計画がスタートし、その中に盛り込んでいますが、今後の課題としては、いま現在一生懸命に取り組んでいるのが県道です。

県道だから県が整備するべきだという考えがありますが、どうしても遅れるのです。もう1本町内を走る県道がありますが、ここの町役場の前の県道は1万台通るのです。島根県でも有数の交通量の多いところですよ。県道と福祉関係、そういうものの整備を一生懸命取り組んでいます。

そのほか、ここでも人口がだんだん減りまして、ピークの1万人がいま8,500人ぐらいになりました。三十数年で1,500人ほどの減少ですから、他の市町村と比べてそんなに大きな落ち込みではないのですが、それでも若い人たちにとっては、ストロー現象というか、松江に近すぎるために松江に住むということになっています。そのようなことから、道路や福祉に並んで、定住対策と情報通信、市町村合併問題、これらがこれから鹿島町が取り組まねばならない最大の課題だと思っています。

地下式下水処理施設は日本で初めて

原子力発電所の立地により、特に2号機の、いわゆる原子力関連の財源で取り組んだ社会資本整備の特徴的なものとして、下水道の整備があります。この町では10年足らずの間に100%の整備をしたのです。私は鹿島町を別名で「ウォシュレットの町」と、胸を張ってそう言っているくらいです。どこでもそうですが、下水道施設のようなものは誰もが嫌なんです、自分の家の近くに建てられるのはね。鹿島町の面積は30km²しかないのですが、その65%が山で、非常に可住面積が少ないわけです。特に人口密集地は漁港近くにあり、その処理場の用地を確保するときに

大変苦労しました。最終的には国でも下水処理施設の研究が進んでおり、鹿島町の施設はトンネルを掘って、そこにすぽっと処理施設を建設しました。「クリーン・カプセル」と言って、日本で初めてでしたが、そのような施設を作り、それで問題を解決しました。そのお陰で、わずか12年間ほどで100%の下水設備の整備ができました。

この100%の下水道事業整備のために行ったもう一つの特色は、この整備に四つの事業を一緒に進めましたことです。だから早く整備ができたのです。農村地帯は農林水産省の「農業集落排水事業」、漁村地帯は「漁業集落環境整備事業」、同じような名前ですが、さらに人口密集地帯の整備については建設省の「特定環境保全公共下水道事業」、人里離れた一軒家のような地域には、厚生省の合併浄化槽に関する補助事業を導入して進めましたから、比較的早く成果が出たのです。

もう一点、こういう下水道の整備は、どこの自治体も事業費の割割を戸数で頭割りして受益者負担をさせますが、



鹿島町ではそれを全部なしにしました。下水道の管路ができて、それを家庭に接続するためにトイレの工事をしなくてはならないわけです。その工事のために各家庭で積立金をしていただく。しかしどうしても借入れが必要な場合には、何%かの借入金の利子に対する補助を町が行う、そういういろいろなことを行っています。鹿島町の下水道整備率は100%になりましたが、普及率はまだ100%にはなっていません。

ちなみに、このトンネル方式は、2番目が神奈川県葉山町が導入しました。天皇陛下の御用邸があります町ですね。葉山町は、知識人とかお金持ちがたくさん住んでいて、ご多分に漏れず総論賛成、各論反対で、下水処理場が自分の家の近くに建つということになると大反対されるため、この方式で一気に解決したということです。

鹿島町がその方式のモデル地域になったわけですね。

【青山町長】私たちも、小さい自治体でもそういう下水道の普及を進め、その事業についてのいろいろな情報を発信できていることに誇りを持っています。逆に私の町が葉山町さんから学んだのが、来年4月1日に完成するマリーナ計画です。葉山町はマリーナの発祥地なのです。このマリーナ事業は島根県で初めてのことで、

社会資本整備の情報が他の自治体と交換できるのはとてもいいことですね。

【青山町長】さらに、ちょっと専門的な話だけど、下水道を処理するとき最終的に滅菌、殺菌を塩素でするわけですが、オゾンの方がさらに透明度が上がって効果があるわけです。私のところは、その水を再利用できるようにしようということで、オゾンで滅菌、殺菌しています。時々湯水がありますが、

そういう時期には公園の散水とか街路樹はその水をたくさん使うのです。

若者が定住する町に

さらに最近では、この町に島根県ではいま一番いい体育館をつくりました。冷暖房つきで温水プールもあります。年間のべ10万人ぐらいの方々に利用されています。大体6割ぐらいの利用者が町外ですが、それは構わない。皆さんに使っていただくことがありがたい。

神代からの歴史があり、その上に近代的な施設を作ることによって住み易い環境を作り、融和させて、若い人たちの将来のために新しい町にしていく、そのようなことをお考えではないかと思いますが。

【青山町長】 そうなのです。

この町の若い人たちに何を期待していますか。

【青山町長】 定住対策として、若い人たちに特に住んでいただくということで、いまソフト面とハード面での事業を進めております。ハード事業としてはそれはごくあたりまえのことで、住宅団地、あるいは安い住宅地を提供するという事業です。一般的には、集中的に、例えば200戸とかを計画しますが、鹿島町の場合は土地の制約もあるし、あまり一カ所に集中するよりも分散型にしようということで、大体20戸までぐらいのものを各地域に適当に配置する計画をたてています。ソフト事業は、若い人が住み易く、子供を育て易い、特に保育料を半額にしたり、延長保育をしたり、高校生のバス通学の補助をしたり、また、高学歴社会を迎えて大学生も大変費用がかかりますので、奨学金とまではいなくても、入学金や学費などの借入金の利息の補助、そのようないろいろなことも検討しております。勿論、あまり手厚い保護はいかが

なものかという気持ちも持っていますが。

お年寄り福祉を先行

若い人たちを分散化させて定住化を図るという計画は、年齢層が混ざり合うことになるわけですから、年寄りと若者の交流、情報交換、いわゆる知恵や経験の交流ですね、そういうものがスムーズになるわけで、かなりいい計画ではないかと思えます。最近はこの町でも、お年寄り対策といいますが、いろいろ苦心しているようですが、この町のお年寄りの比率は意外と少ないようですが。

【青山町長】 いやいや、そんなことはありません。島根県の平均ほどにはなっていませんが、高齢者の割合は高いのです。それで、いわゆる福祉行政の中で一番対象の多い老人福祉については、いま計画的に事業を着工しております。ご承知のように、自分で自分のことができなくなったときは二つのサービスの受け方があります。一つは、家族と一緒に生活しながら、時々サービス、ショートステイ、デイサービス、ホームヘルプとかを受けることができます。もう一つが、どこかの施設へ入ってサービスを受けるというものです。前者の事業はいま着工しまして、町の中心地域に在宅サービス中心である福祉センターを来年（平成14年）の11月に完成いたします。予算は14億円ほどです。来年の盆過ぎには後者のサービス施設である特別養護老人ホームの建設を着工いたします。

既に鹿島町には、以前からベッド150床ぐらいの老人専門の病院がありました。施設サービスが特別養護老人ホーム、老人保健施設、療養型病床群とグループ化されまして、その病院が療養型病床群に切りかえられました。です

から、鹿島町は老人福祉については全く心配ありません。むしろよそからの方も引き受けています。

ただ、これから考えなくてはならないのは、いわゆる元気老人とか、介護保険の対象とならない人たちをどうするか。介護保険の査定を受けても、「いや、あなたはだめですよ」と言われる方々が結構いるわけです。そういう人たちをどうするかということです。次はその対策です。

そういうわけで、老人福祉に関してはそういう対応施設はこれできちんと整備できますから、次は若い人対策ということで、定住化対策に乗り出したわけです。

お年寄りには何時までも心身共に健康でいて欲しい

元気な老人、施設に入らなくてもいい、自分で何でもできるという高齢者がいつまでもお元気でいられるように、そういう方々の健康施設も必要ですね。

【青山町長】心身ともに健康ということで、スポーツとかいろいろな活動に馴染んでいただきたいと思っています。最近、ゲートボール場が深田運動公園の中にできました。屋根つきのゲートボール場です。

すごいですね、天候に関係なく1年中ゲートボールができますね。

【青山町長】そうそう。あわせて、計画中ではっきり決まってないのですが、グラウンドゴルフ場の設置を考えています。全国的にグラウンドゴルフが盛んになりましたね。その日から自分一人でもできます。ゲートボールはチームプレーでしょう。むしろグラウンドゴルフの方が非常に盛んで、この町でも100人ぐらい会員がおられ、しょっちゅう町外へ出かけておられます。1泊で

夫婦連れでね。私も時々呼ばれますけど、ほんとに皆さん元気です。そういう運動や文化的なことも計画しています。

特に文化活動の一つとして、音楽会も開いています。毎年のように来られるのは、ド

イツから来られるウルマー・カンマー・アンサンブル(Ulmer Kammer Ensemble: ドイツのウルム市(Ulm)で結成)というグループです。ドイツではクラシックでも食べていけるのですね。それだけ生活の中にクラシックが溶け込んでいる。日本人の人がリーダーで、5人程のチームです。都会ではなく、都会の人はコンサートの機会がたくさんあるから、地方を回りたいたいということです。鹿島町が受け入れて、いつも盛況で満員です。馴染めないかなと思っていたけど、大丈夫でした。前回では、「自分たちがせっかくいい音を出しても、この施設ではいい音が伝わらない。音響反射板を買いなさい」といわれて、1,200万円で購入しました。確かにいい音が出ますね。

家から引っぱり出すことが元気に過ごす秘訣

町長室のこの絵はいい絵ですね。

【青山町長】ここの役場に架けられている絵は、鹿島町出身の画家の方からご寄付いただきました。そういうコンサートとかのほかにも、絵画にも力を入れています。その画家が文化協会の絵画教室などの指導をして下さっています。そのほか俳句の会とかあり、文化



展を開きますと、盆栽などいろいろな分野の人たちが集まり、陶芸教室の工房もできるのです。

そのほか、町としては、福祉センターの中に約4分の1のスペースを使って、障害者のための社会復帰の作業所を、鹿島町の近くに身障者の作業所の本格的なところがありますので、その分室ということで、センターと一緒につくることとなっています。

また、これからは元気老人を支援する、寝たきりにならないように、いつまでも元気でいていただくために支援する事業も大切と思っています。

いつまでも元気でいられるのが一番いいですね。

【青山町長】比較的最近の事業で喜ばれたのは、空き家などちょっとしたところを使って、地区のおばあさん、おじいさん方がそこへ集まって来てお茶を飲むとか、お話をすることができるようにしました。これは本当に喜ばれています。ただ、お年寄りを家から引っぱり出すのがなかなか大変です。けれど、いったん集まりに参加されると非常にいいですね。リーダー的な人が皆さん方を誘って下さいます。

ここのメザシはブランド品

漁業関係では、ここは加工業が盛ん



なのです。特にメザシが有名です。関西市場ではこのメザシはブランド商品です。価格形成の指導的な役割を果たしているのです。その一番の要因は、今はちょっと少なくなりましたが30軒ほどの店で、10人から多くて15人ほどの家内工業ですが、あまり大量生産、大量消費に対応していなかったため、それがかえってよかったわけです。各店の味を出しながら生き残っておられるし、さらにいいことには、若い人たちが後継者として頑張っています。だけれど逆に、加工をする原料である鰯を取るほうがだめになって、ひと頃は7万トンあった水揚げがいま1万5,000トンぐらいまで減っています。このためメザシの売り上げも50億円、30億円を切るようになりました。

農業は、この町ではほとんど米です。野菜と米を合わせて4億円ほどですが、それでも200haほどの耕作可能な土地があります。ここの田圃、畑は全部暮盤の目のように圃場整備が終わっています。ですから機械化して、お年寄りでも女性でもできます。4割減反ですが、そこでいま大豆を転作の作物としてつくって、これから大豆の加工をして農業の振興を図ろうと思っております。

いままでのお話を聞きますと、町として考えられる振興策のほとんど

をすでに済ませて、あるいは進行中であるようですが。今度3号機の増設に伴い、固定資産税を含めましてかなりの収入が町に入ってきますが、それを使ってこの町の振興にどのような目標をたてていますか。

【青山町長】いやいや、そんなに振興策が進んでいるわけではありません。しかし、鹿島町の場合には少し目標が高いかもしれません。地域振興計画、あるいは第五次総合計画ができており、あとは優先順位をつけて、財源の裏づけをどういう具合にするかということです。計画を全部推進するにはとても予算が足りないのです。

今はそれぞれの地方自治体とも大変な火の車ですが。

【青山町長】私のところもご同様ですよ。ただ、国がくださる地方交付税の場合は、飴と鞭というか、市町村合併が云々、あるいは規模の小さい自治体は行政経費が多くかかるから、そのため経費配分はしませんよということですが、幸いなことに、同じ交付税でも国からいただく一般交付税か、特別交付税かの違いがあります。原子力発電所の立地による交付税は特別交付税で一般的な交付税と違います。しかし電源三法交付金などは逆にひもつきで支出のメニューが非常に限られているということがあります。だんだんよくなっていますけどね。

3号機は隣町の松江市にも大きな恩恵が

3号機ができますと、地元雇用もかなりになりますね。

【青山町長】現在地元の人が発電所あるいは関連施設で600人ぐらい働いていると思います。3号機ができればもっと増えると思います。定期検査も3基あれば年中でしょうから、ほぼ定期的に点検関係者がこの町にいることになります。しかし、一番恩恵を受けるのは松江市なのです。いままでこの鹿島町にもホテルが二つあったのですが、つぶれました。利用しないのです、松江市が近すぎて。同じ値段だったり設備もよかったら、松江に出ます。交通費はみんな会社から出るし、車でも簡単に行ったり来たりできますしね。夜の町もたくさんありますし、楽しい。

若者の定住問題についても、特にハード的なものにもう少し力を入れなければならないという反省の上に立って事業を進めているのです。しかし若者にとっては住宅問題ばかりでなく、都会の松江市の方が気楽に、自由に暮らせますからね。近所づき合いしなくてもいいし、地区のこともしなくてもいいですし。

若い時はそうでも、年を重ねるとまた違ってくるのですが。近所づき合いもいいものですね。

【青山町長】そうなのですね。どうもそれが一番みたいです。若い者は地区によっては年寄りに圧されてあまり発言力もないし、年寄りの言うことばかり聞かされるからでしょう。しかしそのようにしていろいろなことを覚えるのですが、ほんとは。

国は子供にもっとエネルギー教育を

このあいだ、浜岡の発電所の事故がありました。この機会に国なり電力会社に何か注文をつけることができますか。

【青山町長】一つは、このあいだ、実はこの町で、鹿島町と(財)電源地域振

興センターが主催する「エネルギー・プラザ」というシンポジウムがあったのです。その中で一つ大きな話題になりましたのが、消費地との交流でした。消費地の人は、電気を一番たくさん使うのに原子力に反対する人が多いようです。電気はコンセントから自動的にくるというぐあいに思っています。また、例えば三重県の海山町の住民投票にしても、新潟県の刈羽村の住民投票にしても、原子力発電所というのは危険なものだという認識だけです。もちろんそうであるのですが、その先の話が勉強不足でもあるのですね。

ですから、子供のときからエネルギー教育をもう少し行っていただきたい。そういう意味から新しい教科書をちょっと見ますと、原子力は環境とか化石燃料ということから、危険なものだけれども「選択せざるを得ない」という表現になっています。しかし、どういうことが危険で、その危険に対してどういう対策がなされているかという記述は全くありません。エネルギーの教育や、消費地の人たちの理解を得るための事業をこれからもっと進めていただくということが一番です。

この町にも、何かあると新聞記者がたくさん来ます。話の中でいろいろ不安のことを尋ねます。地震があったらどうするとか、人間のミス、ヒューマンエラーとか、あるいは核燃料の話や廃棄物の問題など。地震が心配なら香川県の多度津町（(財)原子力発電技術機構の振動試験施設がある）に行ってみなさい。廃棄物問題は青森県の六

ヶ所村（日本原燃（株）の廃棄物処分施設がある）へ行って見なさい。行きもしないでそのような心配をするのですかと私は言うのです。そのような心配はこの町にもありましたが、私の町では盛んに施設見学会を行いました。すると、見て帰ってきた人がみな「目から鱗が落ちた」と言うのですよ。ですから、ぜひもっと積極的に小さいときから、あるいは消費地の住民にも理解していただけるような事業を活発に進めていただきたいと思います。

エネルギー政策面からも市町村合併を検討すべき

もう一つは、市町村の合併問題です。実はこのあいだ、全国の原子力発電所所在市町村協議会の会合があったときに、集まった市町村長さんが、合併を画一的に進めることについて非常に危惧を抱いておられました。町が大きくなればなるほど原子力に対する風当たりは強まるわけです。原子力発電所の計画を松江市を含めて同意をとろうとしたら、とても大変です。市町村が合併した後で、新たに増設する場合には、回りの市町村まで同意していただくと、島根県だと半分ぐらいの県民に同意していただかなくてはならないことになります。

エネルギー政策、エネルギーの安定供給ということは、国策中の国策ですよ。自治体の合併も大事だけれども、やはり合併問題もエネルギー政策という面からも考えるべきだと思うのです。私たちも、もちろん地域振興という面

もありますが、その前に国民の一人として、何か自分たちとしても義務を果たしたい。それには国のエネルギー安定供給の一翼を担うことだと考えているわけです。それで苦勞もし、がんばってきています。

市町村合併の一つの理由は、国の財政状況が悪くなってきているため、今後、地方交付税がいままでより少なくなることが予想されます。その点については原子力発電所が立地している町は、財政的には工夫すれば何とかやれないことはないと思うのです。

立地市町村はいろんな意味で苦勞が多くて、回りからも責められたりしますけど、隣接は何もしなくても電源三法交付金が入ってきます。

【青山町長】私は肩身の狭い思いをしています。隣接の市町村の議会では、鹿島町の原子力発電所を「迷惑施設」と言っているのですよ。その迷惑施設が立地している町と合併してもいいのか、という気持ちにもなるのです、そんなことを言われるとね。そう言われる方々は、本音として発言されている部分と、政治的な戦略的な発言としての部分もあるでしょうが、言われた方はかなわないですからね。

だから、やはり国策であれば、そういう位置づけをきちんとして、国としても対処してもらいたいと思いますね。

鹿島町のホームページ

<http://www.web-sanin.co.jp/local/kashima/kashima.htm>

自然と共生への讃歌

津島 雄二



2001年9月11日

その日も南仏プロヴァンスの空は、深い蒼の色に塗りつぶされ、雲一つ見られません。地中海地方特有の松林の向うに、灰白色の肌に紫や桃色がかった襞を刻み込んだ、怪異な山塊が見えました。セザンヌが傷心のパリ生活から脱却し、自然の緑と光の造形がもたらす圧倒的な力に惹かれて、画くことのあくなき探求心を取り戻すきっかけとなったサント・ヴィクトワールの山がそこにあったのです。

私達は休日を利用して、エクサン・プロヴァンス（又はエクス）の街からサント・ヴィクトワールに向けてタクシーを走らせ、大画匠の創作意欲を駆りたてたに違いないオブジェを探し求めることにしました。タクシーの運転手は、若い頃かってこの辺りに住んでいたピカソのお抱え運転手だったと胸を張っていましたが、その言葉通りセザンヌがキャンヴァスを立てたと思しい所で次々と車を止めてくれました。ただ気になったことは、彼が飼犬を連れていて、左手でこの犬を抱きながら運転するばかりか、時には肝腎な右手すらハンドルから離して、大げさにチェスチャーを交えて夢中で話すことでした。とても日本では考えられないことですが、私たちは、人の好きそうで親切な、そして多少足に障害があるらしいこの運転手に好意を持ちました。それにしてもこよなく明るい粗笨な

この風景がもたらしてくれる存在感とは何でありましょうか。絶えず盛り上がり^{うごめ}きようみえるサント・ヴィクトワールが私達に送りつけるテレパシーは何でしょうか。この世界は決して心を癒してくれるばかりの、平和なパラダイスではありません。そこには乾きがあり、強風もあり、そしてしばしば野火がありました。山麓にある博物館に入って、展示物やパノラマから教えられるのは、恐竜時代に遡るこの地方の歴史が、多くの災害に彩られていたことでした。それでもこの山には何か揺るぎない確かな存在感があったのです。

博物館から出てタクシーの方に歩みを進める私達を、例の運転手が車の前で手を振って呼んでいます。何かフランス語で叫んでいます。よく聞くと「アメリカで恐ろしい事件が起こった。何力所で飛行機によるテロ攻撃があり、沢山の人が死んだ」と言っているのです。

私達は慌ただしく車に乗り込み、カーラジオを聞きました。みんな無口になり、運転手は時々「お、神さま」とか「恐ろしい」とか言いながらひたすらエクス^{エクス}の街に向けて車を走らせました。ホテルに到着してから、私たちは全世界の人々と同じように、あのワールド・トレード・センターに飛行機が突入し、やがて崩壊するまでを繰り返しTVの画像で眺めていました。

近代文明が創った最大の造型の一つ、

ワールド・トレード・センターがあっけなく崩れ落ちて瓦礫の山と化したのです。その空しいイメージは、私にとって、ついさっきまで眺めていたサント・ヴィクトワールの安定感と余りにも対照的でした。技術の粋をこらして造った便利で居住環境もよく、IT（情報機能）も万全な建造物の崩壊は、私達の近代社会が如何に危険と隣り合わせで存在しているかを鮮烈に実証してくれました。

文明と危険の共存

それから2ヶ月程経った11月6日、私はパリのフランス国民議会別館ヴィクトル・ユーゴー会議室（Salle Victor Hugo）で催された討論会に出席していました。テーマは、「原子力エネルギーの利用は促進すべきか、止めるべきか」というものです。午後のセッションで私の前に意見表明したのは、ヴォワイネ（D. Voynet）女史でした。彼女は知る人ぞ知る原子力エネルギー反対の旗頭の一人です。フランス緑の党の書記長であり、昨年（2000年）まではジョスパン内閣の環境大臣として、スーパー・フェニックス（高速増殖炉）の計画をご破算にしたお仁です。

彼女は、米国や日本からの出席者に敬意を表しつつ、淡々と話し始めました。しかし話しの中味はかなり辛辣なものでした。彼女によれば、フランスは現在電力生産が需要を上回っており、将来これ以上原子炉を作る必要がなく、



サント・ヴィクトール

むしろエネルギー消費を増やさないように抑制することこそが大切とのことです。併せて再生可能なエネルギーの開発を進め、ある程度時間をかけて次世代が原子力エネルギーから脱却できるよう務めるべきであるとの主張でした。また、放射性廃棄物の最終処理とプルトニウムの蓄積の問題が解決されていないことも強調しておりました。

次に促がされて私が意見表明しました。私は、今後人口が増加するアジア地域をはじめとして、世界的にエネルギー需要が増大を続けること、そのなかで温暖化ガスを排出しないタイプのエネルギー開発が不可欠なことを述べ、特に天然エネルギー資源に乏しいうえ、大陸諸国のように外国との送電線接続がないわが国としては、原子燃料サイクルが貴重な国産エネルギーと認識していると説明しました。そして放射性廃棄物処理については立法措置を講じて対策を進めていること、原子力エネルギー利用の安全問題については、国際協力による情報の開示提供が有益であると述べ、日仏間の協力などが成果をあげてきた事情にも触れて、20分程の話を終えました。そこで意外な程大きな拍手を浴びたのには、いささか恐縮しました。恐らく聴衆にとって、ヴォワイネ女史の意見に対する穏やかな反論と、受け止められたのでしょう。

原子力エネルギーを手にした人類は、これと共存していくことを運命づけられていると共感してくれたのでしょうか。

近代社会で人々は危険と共存せざるをえないことは疑う余地のない事実です。その危険の最たるものは戦争であり、最近ではテロリズムも国境

を越えて危険を拡散します。この種の危険は人間の本性に関わるものであり、永遠にその根源が無くなることはないのです。専門家によれば、人類は原始の頃から生存のため、そして飢を凌ぐため野獣など動物を捕獲して蛋白源とし、獲物を取りに向うときにはカテコールアミンを体中に分泌して興奮する仕組みが人間のなかに内在していると指摘されています。私達は、そのような本源的な闘争心や征服欲などと共存しながら、ここまで来たというのが実態なのでしょう。そうであるとすれば、人類が危険な衝動や情動に翻弄されないように絶えず努力し、行動し、人間の怒りに駆り立てられた暴走に対する防御の仕組みを能動的に築かなければならないのです。文明は、人間が危険と共存するという緊張関係の上に築かれたのだとさえいえるでしょう。

共生の世界

それにしてもサント・ヴィクトール山とプロヴァンスの、すべてを包み込むような明るい自然には、ニューヨークのような近代的大都会と違って危険が無いのでしょうか。決してそうではありません。このプロヴァンス一帯は毎年のように大小の山火事(ミストラルという強風にあおられて大災害になることもあった)時には洪水、そ

して大地震にまで見舞われました。

ひとはまた古来多くの天敵にも悩まされました。猪や野兎に農作物を荒らされ、カタツムリに葡萄の葉を食いちらされたでしょう。これらの天敵を煩わしく感じながらも、いつしか人々は自らの糧としてこれらの生物を捕食し、遂には天敵と共生する世界を作り上げてきました。南仏のプロヴァンスはもとより、ポルドーからランドと称する地域は、いつしかこのような野生の獲物(ジビエと称し、英語ではゲームと呼ぶ)の料理の宝庫になりました。ワインの王国ブルゴーニュは、天敵のカタツムリ(すなわちエスカルゴ)料理の本場です。

今回のプロヴァンス滞在は4日間でしたが、私達が昼夜に食した肉類は、小鰹鶏、うずら、野兎、猪、鹿、子羊、ホロホロ鳥、野鴨、鳩、雉などであって、牛肉には遂に一度もお目に掛かりませんでした。別に日本の狂牛病の騒動を意識したものではなく、レストランのメニューで牛肉が脇役にすぎなかったのです。私ばかりでなく、一行5~6名とも、日頃余りなじみのない鳥獣の肉がそれぞれの特性に応じて上手に料理されるのを感じ入りながら、それぞれ食材にふさわしいワインで舌を潤しつつ、殆ど抵抗なく賞味することができました。

プロヴァンスの世界は、まさに人間と自然、天敵を含めた生きものと人の共生共存の場なのです。それにしても、人間とは何と貪欲な動物でしょうか。ですから人間がこうして天から与えられた恵みを存分に享受するとき大切なことは、大自然そして神の摂理に対する感謝の気持ちをもつことであり、捕食される生き物に対する贖罪の祈りを忘れないことではないでしょうか。さもなくば、人は奢り高ぶり、自然を破壊し、遂には滅びの途を辿るに至る恐れがあります。欧米社会の感謝祭や

ハロウィンの行事は、殺生に対する許しを乞い、罪の意識からの癒しをもとめるところに原点があるとも考えられます。私にとって、ミレーの絵にあるような農民の祈りは、そのような心象風景であるようにみえるのです。そういえば日本でも、板前さんの間で毎年催される四条公祭りという神事、すなわち山の幸、海の幸の授かりものについて神様に感謝し、生き物たちの霊を祭る儀式がありますが、この点では東西共通のものがあるといつて差支えないようです。

フランス魚菜市場風景

わが国では、食品流通のコストが高すぎるという批判があります。農家から消費者に届くまでの複雑な中間業者の存在、過剰な包装などが指摘されます。そこで参考にされるのがフランスの青空市場です。農家から仕入れた業者が市内の広場に自分のトラックで運び、仮設の屋台で直接市民に販売するのです。広場は公共のもので、毎日のところもあり、また週に2、3回のところもありますが、午前中に市場が開かれ、昼過ぎに終わる頃には清掃作業が行われます。

南仏エクサン・プロヴァンスの青空市場は、市役所前の広場や近傍の道路を利用して開かれます。食品ばかりでなく、衣料品、家庭用品、花卉類からカセット、オーディオ関係そして小道具類まで、スーパー顔負けの内容です。しかし圧巻なのは、何と言っても食べ物売場です。おなじみの牛豚鶏肉は、それこそ所狭しと屋台に並べられ、皮をはいだ兎がぶら下げられ、毛のついたままの野兎や鴨がその隣に置かれ、小鰻やうずらが調理用に詰め物をされて並べられています。そして生きた食用鳩が籠に入れられて、小さな鳴き声を聞かせています。

青果物と鮮魚の豊富さと安価さにも

驚かされます。水産王国の日本の市場に勝るとも劣らぬ魚種の多さ、貝類、うに、いか、たこなど何でもあります。

パリの青空市場も、モンバルナス、ヌイの2カ所を見て歩きました。プロヴァンスよりも多少値段が高いようですが、品物の豊富さには遜色ありません。また時には意外な食べ物と出会ったりするのです。

今度の旅行で最初の訪問地のブラッセルの魚料理屋で、隣の客の「海の幸盛り合わせ」の中に変わったものがあるのに気づきました。灰色の軟体動物のようで、貝でもなく、魚でもなく、海藻でもありません。店の者に「あれは何だ」と聞いてみると、「ヴィオレット」だと教えてくれました。一種の下手物のようで気になっていましたが、プロヴァンスの青空市場でも売っていました。そして何とパリの青空市場にもあったのです。そこでもあらためて「これは何というの?」と聞くと、「ヴィオレットだ」と言う。「どうやって食べるの?」と聞くと、「皮を切って中身を生で食べるんだ」との答えでした。帰国後に広辞林で調べてみると、ホヤの項で、「南仏でもヴィオレットと呼んで食用にする」とありました。ただ灰色の外見から見て、こちらのホヤは、日本で食用に供する種類(本ホヤ)ではないように思われますが、あのような奇怪な軟体動物を食べるとは洋の東西を問わず人間の悪食ぶりには驚かされます。これを南仏ばかりでなく、パリやブラッセルでも食用に供していることは新しい発見でした。

また、エクサン・プロヴァンスの魚屋でフジツボを売っているのも発見しました。海中の固定物、時には船腹や動物の肌にまで付着するあの邪魔物まで人は食に供するのです。そういえば、フジツボを上手に料理して出してくれる料理屋が青森市にもありました。

エクサン・プロヴァンスの青空市場

には、チーズは勿論、地場の特産オリーブや薬味(ハーブ)の専門店があり、私たちは土産にタイム、バジル、ロマランなどを買い込んだものでした。リンゴや梨やいちご類も結構良いものが、しかも安く売られています(洋梨ラフランスが1キロ200円で買えるのです)。

青空市場を歩きながら、私は旧約聖書(創世記第9章)に「地のすべての獣と空のすべての鳥は、地を這うすべてのものと海のすべての魚と共に、...あなたたちの手にゆだねられる。...すべてあなたたちの食糧とするがよい。」とのくだりがあるのを思い出しました。

それにしてもこの食欲、生命を支えるためとはいえ、これ程の生き物を我がものにする人類とはどういう存在なのでしょう。もしこれが許されるとしても、そのことが人類の業であることは紛れもない事実です。

文明は危険と共存の上に成り立つのですが、そのような実相を強く感得し、如何に許されるか、癒しのため如何に祈るか、このことこそ人類の文化を育む原点ではないかなどと想いを巡らせながら青空市場を後にしたものでした。

セザンヌの晩年に制作されたサント・ヴィクトワール山は代表作(1904~1906年制作)の一つになっています。この絵の上の方の4割は青を基調とする山と空が描かれ、これに白、灰色、紺色の陰影が施され、下の部分は緑を基調とし、黄、オレンジ、黒などで野山に家が点在する風景が展がります。そこには得も言われぬ調和と安息の世界があります。画集でこの絵を眺めながら、セザンヌの描きたかったのはプロヴァンスの共生の世界であり、あの9月11日に私たちの心を打ったものも、この豊かな自然のもたらす充足感、安定感だったのだと納得したものでした。

(衆議院議員)

六ヶ所MOX燃料工場の建設計画

佐々木 正 日本原燃(株)社長

米田 守宏 日本原燃(株)取締役・燃料製造部長

わが国では、ウラン・プルトニウム混合酸化物(MOX)燃料工場を六ヶ所村に建設するための準備が進められています。この施設は、発電所の運転により新たに生み出されたプルトニウムを再び発電所で利用するために、なくてはならない施設です。民間の大規模なMOX燃料工場は、わが国では初めてのことであり、将来のエネルギーの安定確保のためにも大いに期待されている施設です。MOX燃料工場の意義や計画の進捗状況などについて、日本原燃(株)社長の佐々木正さんと、同社取締役・燃料製造部長の米田守宏さんから、2001年11月にお話を伺いました。

(編集部)

本社機能を六ヶ所村に

電気事業を取り巻く環境も大きく変わってきています。特に2001年3月からの電力の部分自由化^{*1}を契機として、電力事業は大変厳しい競争時代に入っています。電気事業関係の一端である原子燃料サイクル事業を担っている私も日本原燃(株)にとりまして、課せられた使命を達成するために、操業、建設、両面において事業の円滑な推進を進めることはもとより、安全の確保をベースにし、コストダウンをしなければならないという時期に至っていると、自覚しながら仕事をしているところです。

日本原燃では、業務運営をしっかりと行うため、組織あるいは意思決定システムも見直しました。現在本社機能は青森市にあります、六ヶ所村での

再処理工場の建設の動きが激しくなり、操業を準備にする段階になりましたので、六ヶ所村に2002年末までに本社機能を集中化することとにします。当然、青森県全域への対応、あるいはメディアへの対応など渉外的な仕事は青森市に大事な部分を残しますが、通常の会社の仕事は、現業が行われている六ヶ所村で完結するような形にいたします。

再処理事業計画は順調

再処理事業は、私どもの事業の中核的な存在です。2001年10月末現在で建設の進捗率が78%となりました。この進捗率を、現時点で、運転開始までの計画と比べると前倒しで工事が進んでいます。それが試運転などの次の段階でプラスに作用すればと思います。建設は総合的に順調と言えます。

例えば、使用済燃料を細かく切断し

硝酸により溶解する前処理建屋では、2001年4月から水を使ったり、蒸気を使ったりして通水作動試験を行っています。設備の不具合を早期に発見するために試験しますが、フランスの再処理工場での事例ですと、通水作動試験の段階で80%ぐらいの不具合を、例えば水の流れが計算値と異なるとかの問題点を発見していますから、この通水作動試験には全力を挙げて取り組んでいるところです。

現在、再処理工場は工事がほぼ終わり、既に通水作動試験が始まっていますので、工事と試験が並行して進む大事な時期に来ていると思っています。

さらに再処理工場の運転が重要ですので、運転技術などの習得を行うためにフランスのコジェマ社と契約を結び、様々な形での技術支援を受けることにしています。運転に携わる責任者、それを補佐するリーダー、上級の運転員など約70名をフランスのラ・アーグ工場に送って研修をさせます。第1班が2001年の9月から12月上旬までの約3カ

* 1 : 電力の部分自由化 ; 電気事業の効率化と公益課題の両立を図るため、2000年3月より、大規模工場など使用規模が2,000kW以上の需要家を対象(全需要の約3割)に、従来の電力会社以外の者でも小売り供給が可能なるように、競争が導入された。

月間の予定で研修を受けています。

特に第1回目の研修の成果は第2回目の研修に生かし、引き続き3回目以降に生かすという形で始まったばかりです。一人の研修生に対して二人の指導員が付き、「具体的にこう動かせ、こうしなさい」と指示する人と、全体としてコントロールする人が横について、1対2で研修をしているところです。

再処理業務を開始するには、処理する使用済燃料を用意しておく必要があります。運転開始の時期までに使用済燃料1,600tを用意する計画で、2000年12月に第1回目の使用済燃料の運び入れを行いました。2001年10月末現在で1,518体、348tを既に受け入れています。3,000t容量のプールですから、容量の10%を超えるところまで受け入れました。

濃縮の新技术開発にオール・ジャパンで

次に、ウラン濃縮事業ですが、年間1,050tSWU*2の操業規模で運転しています。しかし現実には、遠心分離器が止まる台数が少し多くなり、現在は年間900tSWUの規模で操業しています。地元に対しては1,500tSWU規模の工場をつくる約束をし、私どもも建設計画を進めているところですが、経済性の点から濃縮機器の能力自体をさらに高いものにしたいということから、9年後の2010年頃に新しい濃縮機器による生産を開始する計画で、2000年11月に



佐々木 正氏

「ウラン濃縮技術センター」という開発組織を立ち上げました。濃縮技術を持っているサイクル機構とメーカー及び当社による、オール・ジャパンの体制で取り組んでいこうと、新技术の開発を始めたところです。センター設立から1年経ちましたが、順調に基盤整備ができ、具体的な開発内容にこれから入るといふ時期です。

ガラス固化体貯蔵建屋の増設を計画中

高レベル放射性廃棄物の管理事業ですが、既設の貯蔵施設は1,440本の容量があります。海外からの返還ガラス固化体を1995年から6回受け入れていますが、受け入れ本数は現在464本です。したがって1,440本の容量の3分の1ぐらいに当たります。今後、ガラス固化体の受け入れが順調に進みますと、2005年頃には新たな貯蔵建屋が必要となりま

すので、その増設を行うため2001年7月に国に新たな貯蔵建屋のための廃棄物管理事業変更許可申請を行いました。その施設が完成しますと、全体で現在の2倍の2,880本の貯蔵容量となります。

追加の施設が完成しますと、今までに海外に再処理を依頼したことによって我が国に帰ってくる高レベル放射性廃棄物の全量が、それらの中に収納できます。収納しなければならない量は、大体2,200本ですので、ちょっと余裕を残した施設になります。

低レベル廃棄物は予備調査を開始

低レベル放射性廃棄物の埋設事業では、1号埋設施設が20万本の埋設容量で、現在13万2,011本が埋設されています。2号埋設施設は、金属類をドラム缶の中に入れて、そのドラム缶にモルタルを流し込んだものを廃棄体として埋める施設で、1号施設と隣接していますが、区分しています。こちらは2000年10月から、2,520本の埋設を行いました。

低レベル放射性廃棄物の中で、放射能レベルの比較的高い廃棄物については、国の原子力委員会で検討された処分概念では、一般的な地下利用に十分余裕を持った深度、例えば地表から50mから100m程度のところに埋設することが考えられています。この対象となる低レベル放射性廃棄物は、原子力発電所などの運転や解体に伴って発生する放射能レベルの比較的高い金属や使用済樹脂などです。当社においては、これらの廃棄物が六ヶ所村の事業所内で安全に処分できるかどうかを確認するために、地元のご理解を得て、ポー

* 2 : SWU ; Separative Work Unitの略で、「分離作業単位」。ウラン濃縮で、ウラン-235とウラン-238を分離するための作業量の単位を示し、重さの単位を持つ (kgSWU、tSWU)。

リングによる地質、地下水の予備調査を2001年7月から開始したところです。この調査結果が良好ならば、次の段階の本格調査へ進む予定です。しかし、地元の理解を逐次得ながら次の段階に進むということになります。その第一段階の予備調査が開始できたことについて、ホッとしています。

以上、われわれが現在担当している四つの事業で、再処理事業以外は操業しています。また、再処理もいよいよ操業に近くなってきました。

5番目の事業がMOX燃料加工

日本原燃(株)の新しい事業がMOX燃料製造事業です。日本原燃では、会社の定款などを変更して、MOX燃料製造事業ができるように準備しておりましたが、2000年11月に電気事業連合会から、その事業を日本原燃で行うようにとの要請を受け、社内での検討を経て、MOX燃料加工の事業主体になることを表明させていただきました。われわれにとっては五つ目の事業ということになります。

その後、サイクル機構と技術協力協定、フランスのコジエマと技術移転契約を締結し、同時に基本設計を進めました。また、2001年8月には、青森県並びに六ヶ所村に対してMOX燃料工場の立地についての協力要請をさせていただきました。青森県並びに六ヶ所村が私どもの立地協力要請を受け、検討していただいていることを大変ありがたく考えております。

MOX燃料加工事業は、再処理事業と密接に関係する事業ですが、地元との

今までの立地基本協定には含まれていない新たな事業ですから、要請を受け取られた木村・青森県知事は、「慎重の上に慎重を期して、手順、手続きをしっかりと踏んで進めることが、県民の意向を踏まえることでもあり、議会などでの議論を通じて結論を出す」ということを表明されています。

青森県での具体的な手順、手続きに関しては、「安全性チェック・検討会」が二度開催されました。第1回の会合の次に東海村のサイクル機構のMOX燃料施設を視察いただき、第3回目の会合が間もなく開催される状況にあります。その他に、「原子力政策青森賢人会議」が1回開かれ、2回目はやはりサイクル機構のMOX施設を視察していただきました。また、既に県議会での議論も行われています。さらに今後、県内の中核地域、例えば青森市、弘前市、八戸市など、六つぐらいのブロックにおいて県としての説明がなされた上で、県民の方々のご意見を伺うこととなっています。国の方針の確認、あるいはプルサーマル計画の状況などを踏まえて、総合的にご判断いただけたと考えております。また、六ヶ所村では、村長も村議会も含めて、県と同じように幅広く村民の方々の意見を聞いた上で、県と連携を取りつつ対応をしていただけたということです。

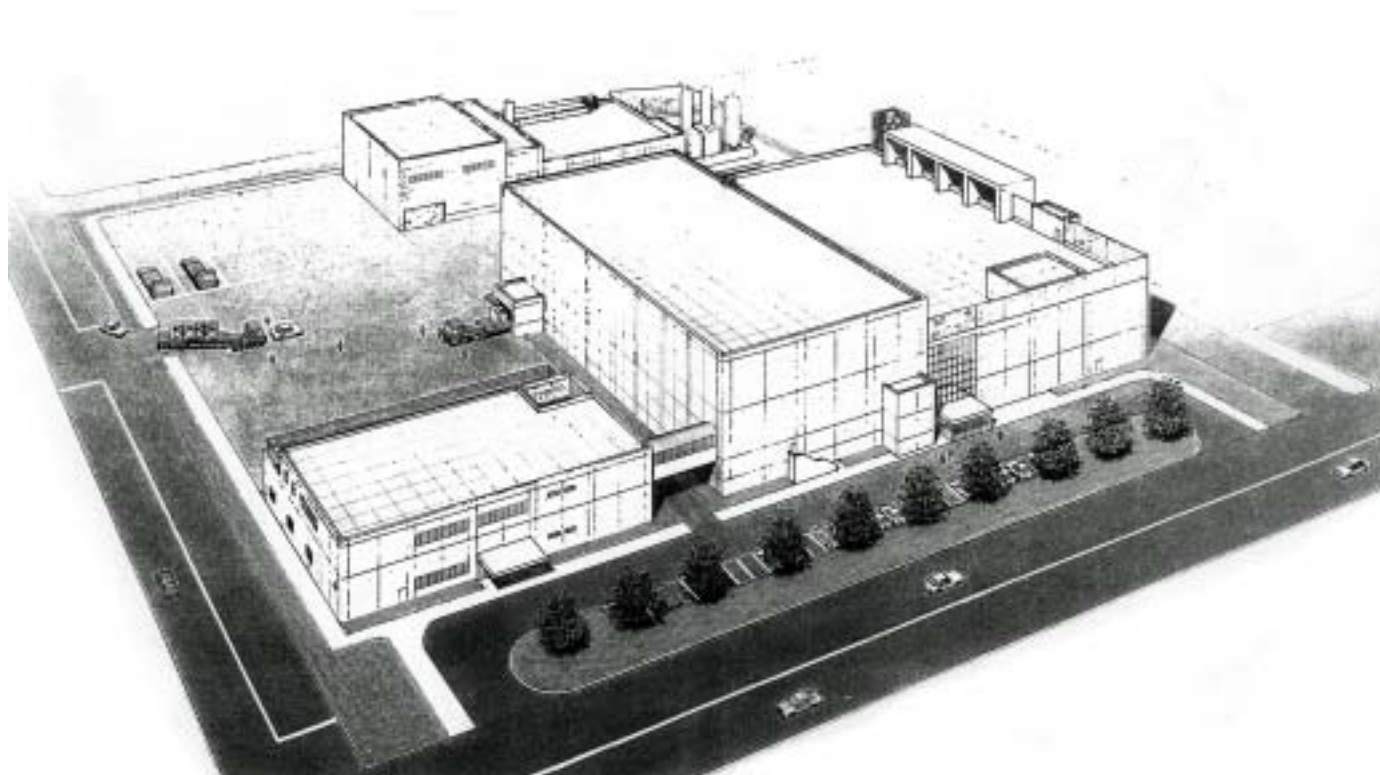
私どもとしては、MOX燃料加工事業を確実に進めること、またコストダウンをしっかりと行い、国際価格並みに競争ができるような価格をめざしていくということで、頑張ったいと思っています。

いずれにしても、原子燃料サイクルの確立に向けて、安全確保の徹底と事業基盤の強化、地域との信頼関係の確立をわれわれの仕事の上での基本としていますので、引き続きこの基本方針のもとに全力を挙げて取り組んでいきたいと考えています。

MOX燃料加工事業計画の着手

MOX燃料加工事業を始めるにあたっての経緯をもう少し詳細に申しますと、1998年10月に、電気事業連合会(電事連)から国内のMOX燃料加工事業に関する事業化調査への協力要請を受けました。これを受け日本原燃では、同年1998年12月に事業化調査を開始し、約2年をかけこの調査を行いました。その間、1999年3月に定款の事業目的に「混合酸化物燃料の製造」の項目を追加しました。また、同年6月にはサイクル機構と事業化調査に関する技術協力協定を締結し、技術情報の提供やエンジニアの派遣などを受けています。

2年の調査の後、2000年11月に電事連に事業化調査報告書を提出しました。電事連はこの報告書を受け、電事連の総合政策委員会(社長会)で、国内のMOX燃料の事業化は十分に可能だという結論を出しました。これを受け、電事連から当社に対し、事業主体になるように要請を受け、当社はこれを受け事業主体の表明を行いました。これにより2000年12月に、日本原燃(株)の中に燃料製造部を設置しました。また、サイクル機構との間で建設・運転などに関する技術協力協定を締結しました。その後工場の基本設計など、立地協力



MOX燃料工場完成図

要請に向けた諸準備を行い、2001年8月に、青森県並びに六ヶ所村に対して立地協力要請を行いました。私どもの立地協力要請時に、国から次のようなコメントをいただいております。まず、経済産業大臣からは、「MOX燃料工場は、再処理工場において使用済燃料から回収される有用資源であるプルトニウムなどを、原子力発電所で使用するためのMOX燃料に加工する工場であり、わが国における核燃料サイクルの確立に不可欠なものである」とのコメントです。また、原子力委員会からは、今回の計画について、「わが国の核燃料サイクルの根幹をなす施設で、不可欠

なものである。今回の立地協力要請は、原子力長計の趣旨に沿ったものである」というコメントをいただきました。

MOX利用は日本でも実績がある

世界の主なMOX燃料工場としては、まずベルギーのデッセルPO工場は年間40tの加工能力をもっており、すでに30年近く操業しています。フランスでは、カデラッシュ工場(CFCa)が年間40t、マルクルのMELOX工場が年間100t規模であり、MELOX工場ではさらに2倍規模の増設が終わっていると聞いています。イギリスでは、セラフィールドにMDFという処理能力年間8tの小さい

MOX燃料加工工場があり、同じところにSMPという年間120t規模の工場が既に建設されており、現在ウランで試験運転を行っている段階です。

わが国では、サイクル機構の第二開発室(東海村)で新型転換炉(ATR)の「ふげん」用の燃料を、第三開発室で高速増殖炉(FBR)の「常陽」「もんじゅ」用の燃料を製造している実績があります。ドイツのハナウ工場は、建物は完成しましたが、原子力政策が変わったため解体されることとなっています。

原子力発電所へのMOX燃料の装荷は、30年以上前からフランス、ドイツ

などのヨーロッパ諸国を中心に行われていますが、この2国ではそれぞれ1,000体以上のMOX燃料が利用されている実績があります。日本では735体のMOX燃料が装荷されましたが、このうち729体はサイクル機構の施設で加工され、ATR「ふげん」発電所に装荷されたものです。また、沸騰水型軽水炉（BWR）である敦賀発電所1号機で2体が、加圧水型軽水炉（PWR）では4体が美浜発電所1号機で、1980年代後半から90年代初めに装荷され、試験的に利用されました。

全ての原子力発電所でPuが発電に寄与

MOX燃料とは、ウラン酸化物とプルトニウム酸化物を混合した（Mixed Oxide）燃料のことを言います。原子炉の中に装荷する燃料集合体の形は、ウラン燃料と同じ形状です。長さ10mmのペレットをジルコニウム合金の被覆管の中に入れ、それを束ねて集合体にしますが、ウラン燃料と同じ設計です。異なるのは中のペレットだけです。ウラン燃料は、燃えやすいウラン235を使い、濃縮度は3～5%です。それに対して、MOX燃料は、この燃えやすいウラン235のかわりにプルトニウムを4～9%程度入れたもので、このプルトニウムの一部が燃焼するということとなります。

ウラン燃料だけを使って運転してい

る現在の原子力発電所においても、発電のために燃やされる割合としては、ウラン235が燃えて発電した量が約63%、運転中にウランが転換し、できたプルトニウムがさらに燃えて発電した量が約30%です。すなわち、ウラン燃料だけを入れた発電所であっても、すでに3割程度は炉の中で作られたプルトニウムによって発電されているということです。「プルサーマル」というのは新しい話のように聞こえますが、実態としては世界中の430の原子力発電所全てでプルトニウムが燃え、電気の30%がそのプルトニウムにより作られています。

加工事業の範囲は燃料の製造から発電所への輸送まで

日本原燃のMOX燃料工場は、次のような工程で構成されます。再処理工場から取り出された原料のMOX粉末に、所定のプルトニウム濃度になるように二酸化ウランの粉末を混ぜ、これを円柱形に成型し、高温で陶器のように焼き固めて「ペレット」を作ります。そのペレットを長さ約4m、太さ約1cmのジルコニウム合金の被覆管に入れ、両端に栓を付け溶接して「燃料棒」を作ります。この燃料棒を束ねて「燃料集合体」に組み立て、検査をします。その後、燃料集合体を輸送容器に入れ、原子力発電所まで出荷します。

この工場の加工能力は、年間最大

130tです。この量については、日本原燃の再処理工場から1年間に抽出されるプルトニウムの全量をMOX燃料に加工できる容量です。工場の建屋の規模は約80m×80m、地下3階、地上1階、一部は2階になり、鉄筋コンクリート造りです。主なプロセスはほとんど地下に入ります。設置場所は、再処理工場のMOX粉末貯蔵建屋に隣接します。工期は、着工が2004年4月頃、操業が2009年4月頃を予定しています。建設費が約1,200億円、操業人員300名弱を予定しています。

安全確保が第一義

安全対策としては、当然ながら、法令、規格、基準などを遵守し、一般公衆はもちろんのこと、放射線業務にたずさわる従事者の線量をも合理的に達成可能な限り低く抑えることを基本とします。さらに、臨界安全、放射性物質の閉じ込め、放射線のしゃへい対策などに徹底した安全対策を行い、安全確保に万全を期したいと計画しています。

放射線のしゃへい対策、被ばく低減対策としては、まず建物構造壁などによって放射線をしゃへいし、さらに、設備、機器を自動化・遠隔化して、放射線業務従事者の被ばく低減を図ります。放射性物質の閉じ込め対策としては、グローブボックス*3などにより放射性物質を閉じ込めます。そのため、ほとんどの作業をグローブボックスの中で行うこととなります。

火災・爆発防止対策については、まず全体に不燃性または難燃性の材料を

* 3：グローブボックス；放射性物質をボックス内に密閉した状態で取り扱うための箱（ボックス）。ボックスの外から内側に向けてグローブが取り付けられており、人の作業はこのグローブに手を通して行う。

使い、火災・爆発を防止します。飛来物対策として、工場への航空機の落下、墜落を想定して対策を講じます。六ヶ所村の立地地点固有の社会環境として、近くに米軍の三沢基地がありますので、再処理工場と同様に、飛来物対策を行うことを考えています。

また地震対策も他の原燃施設と同様に、十分な耐震性を持たせます。臨界安全対策としては、乾式のプロセスで取り扱うため、そもそも臨界になりにくくなっていますが、質量管理、形状寸法管理、中性子吸収材使用などにより臨界安全管理を行います。

放射性廃棄物の処理は、気体、液体、

固体に分けて行います。気体については、換気系に高性能エアフィルタを複数段付け、放射性物質を除去し、連続してモニターしながら安全を確認し、放出します。液体廃棄物については、手洗い水などの液体は必要に応じてろ過、吸着処理を行い、法令に定める濃度限度以下であることを確認した後、再処理工場に移送します。再処理工場からは海洋放出管がありますので、その管を利用して海に流すことを考えています。固体廃棄物については、可燃、難燃、不燃がありますが、性状別に容器に入れ、再処理工場の貯蔵庫に保管する計画です。

[意見交換]

軍用機の墜落などの飛来物対策は講じている

委員A フランスのMELOX工場は建設を着工してから稼働するまでに何年ぐらいかかったのでしょうか。六ヶ所村の工場は5年の予定ですね。

米田 同じぐらいかかっています。六ヶ所の工場では、試運転として、ウランでの試験をしてから実際のMOX燃料での試験をしますので、それを1年半ぐらい予定しています。建設期間が5年というのではなく、試運転を入れて5年ということです。工事は3年半から4年程度かかります。

委員B 9月11日にアメリカで同時多発テロがありました。飛来物対策としては、あのような状況も考えているの

でしょうか。

米田 飛来物対策については、ご承知のとおり、三沢の基地が近くにありますので、再処理工場も含めて、いわゆる軍用機の墜落というか、飛来物対策についてはすべて建物で飛来物からの影響を遮断する設計にしています。

佐々木 基地が隣接していることから、航空機の墜落は戦闘機などが直角にぶつかっても問題ないという考え方で設計しています。

委員B ジャンボ旅客機がぶつかっても大丈夫ですか。

佐々木 ジャンボ旅客機がぶつかるというテロを想定した一番極端なケースについては、まだ計算したものではありません。

飛来物についてあらゆる可能性を想定すると建設はできない

委員A ジャンボ機とか、戦闘機がぶつかることを、原子力関係の施設ばかりでなく、あらゆる施設、工場でも想定しなければならないということになると際限がないのではないかと思うのです。

委員B 突っ込んだのがジャンボ機でしたから、大きいから大変のように見えますが、旅客機の中味はほとんど空で、重さを持っているのは燃料とエンジンだけです。燃料は火がついて燃えればそれで済みです。エンジンがぶつかったときにどうなるかが問題です。この点については、エンジンがぶつかったときにどうなるかは、若狭湾周辺で原子力発電所を建てるときに全て計算しています。

その計算では、艦砲射撃でなければ、飛行機のジェットエンジンが横からぶつかったくらいでは大丈夫なのです。問題は真上から飛行機が落ちてきたときに、そのエンジンが原子炉にドシンと落ちることがあるかもしれないので、このような種類のことが起きたときに大丈夫かどうかチェックしないといけないと思うのです。しかし、全てについて想定しなければならないのでは、原子力に限らず、この社会では何にもできません。

委員A すべての建造物は建設できないということになりますね。

米田 六ヶ所再処理工場の建物は天井が1.2m程度の厚さにしていますので、上からの飛来物対策はできています。

また、MOX燃料工場はほとんどが地下に設備を収納していますので、まず問題は無いと思っています。再処理工場も同じです。しかし、ミサイルなどのことを想定すると、必ずしもすべて大丈夫ということにはなりません。

委員B おっしゃるように、簡単にすべて大丈夫だということかえって反感を招きかねません。

委員C 上から大量の燃料が爆発するというその火力に対して、この種の構造物が強いかわ弱いかはどうですか。普通のビルよりは強いと思いますが。

米田 天井も縦壁も厚さが1.2m以上ありますので、ジェット燃料の火力で壁がぼろぼろになるということはまずないと思います。

安全的な設計の上限は？

委員A ただ、今度の同時多発テロのようなことを想定して、壁面をもう少し厚くするとか、天井を厚くするとかは検討されているのですか。

佐々木 MOX燃料工場の設計は今進めています。完成間近で、これから試運転の時期に入る再処理工場については、今からの変更はありません。当然ですが、再処理工場の設計段階では、斜めからぶつかるケースよりももっと厳しい直角にぶつかることを想定して設計しています。特に三沢基地とか射爆場との関係で、考えられる事故を想定しています。

委員A 全ての攻撃を想定したら、日本列島を全部核シェルターにしなければならぬ状況になってしまいますね、住宅も、工場も、国会議事堂も、新幹線も、高速道路でも。


委員B 20kt（爆発威力がTNT火薬の量にして2万トン）ぐらいのミサイルを撃ち込まれたら何をつくってもだめです。

委員A 何をつくってもだめということは、どこまで安全的な設計をするかという上限があると思いますね。しかし、そうは言っても、安全に対する理

解を得るための一定の防護施設というものが必要ですね。

米田 戦争状態のような時の安全問題は、日本の安全保障の枠の中で検討されるべきものだと考えています。

佐々木 私たちは、今回のような形での経験がありません。このような場合には日本の安全保障の中で考えていただければ、と申し上げる場合でも、逃げているという姿勢ではなく、むしろいろいろな施設以上に一生懸命取り組んでいることを分かっていたきたいのです。しかし、現地で仕事をしていて、いろいろな方々が来られ質問を受けるときに、同じレベルで理解し合うことの難しさをしみじみ感じているところです。

委員A 日本原燃は、わが国の原子燃料サイクルの要を担当していくわけですから、慎重に、しかし熱意を持って進めていただきたいと願います。 

私のエネルギー史断片（その二） 「有澤さんと沼さんと」

後藤 茂



夜が長くなった。東京にも木枯らしが吹いて、冬来たるだ。いつの頃からだろうか、本を読むのは、晩秋から冬にかけての、寒い季節を好むようになった。きょうは勤労感謝の日、休日である。書斎の窓に、桜の紅葉が街灯に映えて、美しい。

私は、『有澤廣巳の昭和史』を取りだして読みはじめた。学問や思想、人間について書かれた随想三冊を函に入れた、立派な本である。

有澤さんは、東大経済学部の助教授になってはじめて教壇に立ったときの気持ちをこう語っている。「不思議なもので、胸がつかえたような、どうにも腹がすわらないで、足が宙に浮いているような」と。この自信なげに立っている若い助教授をやりこめてやろうとねらっていた学生に、佐多忠隆（社会党参議院議員）、芹沢彪衛（武蔵大学教授）の諸君らがいた。講義をひとくさりやると、途端に「先生、質問があります」とくる。有澤さんに、「どうもこの連中には悩まされた」（エッセイ『はじめて教壇に立つ』）と言わせた佐多さんや芹沢さんは、私にとっても忘れられない人である。その授業風景を想像して、私は、思わず笑っていた。

昭和の初めのころだ。有澤さんは脇村義太郎助教授を誘って、世界経済の実証的研究をする研究会をつくる。集まったのは阿部勇、美濃部亮吉、南謹二、芹沢彪衛、笹川金作の諸君であった。原資料を調べたり、知識も急速にひろがってきたころ、世界は恐慌に突入する。わが国は暗黒時代に入り、あの忌まわしい戦争への道につき進んでいったのである。

人民戦線派に鉄槌
官私大の教授等九名
大内、有澤、美濃部ら中堅学究
今晚全国に総検挙

昭和13年（1938）2月2日の新聞を開いてみると、この記事は一面トップの五段抜きである。とんび（二重回しのコート）を着た大内兵衛先生を真ん中にして、教授らを顔写真付きで報じていた。芹沢教授の名も見えた。研究会は週一回程度大学の研究室でひらいていたが、目立つようになってきたので、各人の自宅で持ちまわりにしていた頃である。治安維持法違反というのであった。その前年暮れには、大森義太郎や中外商業新報社（現日本経済新聞社）にいた伊藤好道ら労農派と目されていた人々が、一網打尽になっていた。有澤さんは巢鴨の拘置所に送られた。

^{すっぱだか}素裸体にされ、検閲官のまえに立った。

独房だから隣にたれがいるのか、全くわからないはずだが、二、三カ月もたつと、運動に出るときとか、入浴のときとか、なにかの折りに、たれがどの房にいるかということがわかる。… 山川（均）さんが同じ房舎の端の独房にいたり、向坂（逸郎）君が四、五軒隣にいたり、向かい側に芹沢（彪衛）君がいることもいつのまにかすっかりわかった。（エッセイ「軍国主義の旗の下で 暗い監房の内 外」）

有澤さんの本を読んで、少し長くなったがこの時代のことにふれたのは、私の人生の師として、忘れられない方々だったからである。

戦後間もなく私は、向坂逸郎先生を識り、作家の平林たい子さんのご主人小堀甚二さんの紹介で、重電機労働組合の常任書記を務めたことがある。小堀さんは労働運動の指導者の一人であった。そんな関係もあって教授グループの皆さんのご指導を受けるようになったが、経済問題はいつも芹沢先生に教えを仰いでいた。

私は、よく小石川植物園近くにお住まいの先生のお宅に伺ったものであ

る。先生は、自宅ではいつも着物姿であった。名前の彫衛からうける猛々しい感じとは違って、ひょうひょうとした人柄、それでいてなにかこう、人を惹きつけるものがあった。二つに切った巻きたばこを、短い煙管に詰めていた先生、その学者らしくない風貌が、いまでも懐かしく思い出される。私が、先生の姪と結婚することになったのも、不思議な縁である。

社会党本部では和田博雄さん、伊藤好道さんら歴代政策審議会議長のもとで政策作りに励むことになった。革新官僚として投獄された経験をもつ和田さんは、吉田内閣の国務大臣を務めた方だが、社会党に身を投じ党の幹部として活躍された。私は、経済安定本部長官もされた和田さんから、政策とは何か、を教えられたのである。

迫る雪山に向かって歩む
何かが欠けている

俳人でもあった和田さんの句である。この句には、「社会党は政権をみざして活動しているが…。重要ななにかが欠けている。私は惧る。根本において、私たちにに対する信頼が欠けているのではないかと…」と、附記されている。のちに私が党内で原子力論争をしたときのことを振り返ってみると、この句に寄せた和田さんの熱い思いが、私を勇気づけてくれていたのかと、感慨深いものがある。

昭和30年（1955）の8月、ジュネーブで原子力平和利用国際会議が開かれた。超党派の国会議員団を送ろうと、

各党に根回ししたのは松前重義先生であった。その結果前田正男（自）、中曽根康弘（民）、志村茂治（左社）、松前重義（右社）の出席が決まった。

このときの人選で、えらくもめてね……。あれには参ったよ。中曽根君はいまでこそ総理大臣を務める大物政治家だが、当時はまだ青年代議士で、党内には「若造のくせに何だ」という反発が強く、長老の三木武吉氏に「何とかしてほしい」と頼み込み、やっと了承を取りつけてもらった。（松前重義著、『わが昭和史』）

ところが、議院運営委員会では、「そんなわけの分からん会議に、国会代表を送るのは、日本の恥辱だ」と反対する理事がいて、すぐには決まらない。松前さんが、いくらでもいいから金を出せとねじこんで、やっと国から出た渡航費は、たったの一万円であった。まったくひどい話だが、それでも国会代表の名分は立った。

国際会議に出席してみると、欧米の代表がづつづつに立って、原子力利用に関する技術研究の状況を発表する。ところが日本には発表するものが何も無い。これは大変なことになったと歯ぎしりである。“井のなかの蛙”を思い知らされた4人は、意を決して欧米諸国を回ることにした。「毎晩のようにホテルの一室に集まって、本当にまじめな議論をしたよ。原子力の平和利用の実状を調査してみて、原子力時代への備えを急がなければならないと痛

感したなあ」。松前先生からこんな話を何回聞いたことだろうか。先生の目の輝きに引き込まれながら、私まで原子力の黎明期の話に興奮していたのであった。

「アメリカでは原子力施設を見た。ハーバード大学でキッシンジャー・ゼミを覗き、ニューヨークでは日米財界人と会い、パークレー大学で嵯峨根遼吉先生の助言をうけた」。先日中曽根元総理とお会いしたとき、こんな話も聞いた。こうして4人は、原子力基本法と、科学技術省の設置を超党派で推進することを誓いあったのである。羽田空港に降り立った4人はまさに意気軒昂であった。これこそ重大ニュースとの思いで記者会見にのぞんでみると、取材にきたのは朝日新聞だけ。「こっちは四人なのに、相手は一人だ。まったく拍子抜けしたよ。翌日の新聞を見たら、君、ちょこっとしか載っていなかった」と、かっか笑う松前先生、そんな時代があったのである。

この年、11月も終わろうとしていた。国会周辺の公孫樹が、黄金色に染めた葉を散り急がせていた。そんな景色を眺めていた私に、伊藤好道政審会議長の呼びだしである。「浅沼書記長と一緒に有澤君のところへ行ってきたまえ。原子力委員になってもらうんだ。話はしてある」というのである。出会う場所は神田の神保町であった。

森一久さん（現日本原子力産業会議副会長）は、有澤さんから聞いたその場所はミルクホールだった、とどこか

に書いておられたが、私の記憶では、戦時中の外食券食堂のような、そば屋か一膳飯屋の2階であった。神保町の交差点を水道橋に向かって最初の路地を左にちょっと入った左側にあった。同じ原子力委員になった藤岡由夫さん（東京教育大学教授）は、それは銀座のレストランと聞いたという。どこでもいいとはいえ、歴史はきっちりと記録しておく必要があると思ひ、あえてその場所にふれておいた。

沼さんは汗っかきであった。流れる汗を拭きふき、あの大きな体を寄せて、「正力さん（国務大臣）と約束をとりつけてある。社会党から推薦する人は原子力委員にするので、ぜひ受けていただきたい」と、単刀直入の口説きである。有澤さんは、にこにこ終始笑顔をくずさなかったが、「原子力なんかぜんぜん知らんからいやだ」と、なかなか頑固であった。しばらく押し問答がつづく。「平和利用の番人ですよ、先生」。沼さんの気迫に負けたといわんばかりに、有澤さん、「東大総長の矢内原忠雄さんの意見きいてみます」ということでその場を辞した。そのとき私はあらためて、沼さんは真っ直ぐな人だなあ、と感じたのであった。「後藤くん、よかったな、うん、よかった」と、もう引き受けてもらったかのように、私の手をぎゅっと握ってくれた感触を、いまでもはっきり覚えている。

矢内原さんは「ウーム」といった。そして最後の返事は「きみ、やり

たまえ、その平和利用の担保というのは非常に重要だから。ただ、一つ注文がある。その原子力開発は大規模開発になる、つまりビッグ・サイエンスになるから、金が非常にたくさん出るんだ。その金で大学にタッチしてくると困る」といった。（「エネルギー革命下の経済学者 有澤、脇村対談」から、『エコノミスト誌』）

昭和30年12月14日原子力三法が衆議院を通過した。その翌年1月に発足した原子力委員会の委員に、有澤先生が就かれた。先生を推薦した社会党は、それから十数年間は原子力平和利用の先頭に立ったのであった。この背景に戦前の無産政党にかかわっていた多くの知識人が原子力政策を理解し、社会党を支えてくれていたことを見落としてはなるまい。

あの戦時下、弾圧された知識人の多くが、国会議員になった。また大学に戻って教壇にたった。そのゆたかな経験と学んできた学問を、社会党の政策や政治理念に注いでくれたのである。しかしこれらのすぐれた知性は、その人々の死とともに社会党から失われていった。とくにエネルギー政策、原子力問題に顕著だったといえるだろう。

「原子力基本法は私が起草した議員立法である」（エッセイ『政治と科学』）松前先生の狭い議員会館の一室で、鉛筆をなめながら深夜おそくまで一緒に起草した日のことが、ついきのうのことのように思い出される。当時上野の

森にあった学会会議と連絡をとりながら、草案のすりあわせをしたものである。「平和の目的に限り、安全の確保を旨として、民主的な運営の下に、自主的にこれを行うものとし、その成果を公開し、進んで国際協力に資するものとする」この第二条は、「松前さんがつくってくれた」と、中曽根元総理の口からもあらためて聞いた。いまでは原子力基本法が議員立法であったことを知る人も少なくなったが、この条文は、いまでも私の心に秘かな喜びを充たしてくれている。

「社会党政策審議会に、新進気鋭の政策マンであった後藤茂君がいた。実にのみこみが早いそれに勉強家でもある。私は愛弟子とも思える後藤君を得て、早速、党の政策づくりに没頭した。……後藤君は、その鋭い感覚で、科学技術に強い関心を寄せてくれた。各種研究所の調査には、いつも私のそばに後藤君がいた。ほんとうによき助手であった」（松前先生からの手紙）

私が衆議院議員に当選したとき、すでに政界を引退され、東海大学の総長として教育界で活躍されていた松前先生から、こんな励ましの便りをいただいた。先生の期待に満足に答えていない不肖の弟子である。冷や汗の出るような文面である。だからこれまで「^{きょうてい}窟底深くしまっていた。しかし、私への大切な^{しんげん}箴言だと思っているので、ここに書き写したことを許していただきたい。

（元衆議院議員）

Plutonium

Winter 2002 No.36

COUNCIL for
NUCLEAR
FUEL
CYCLE

発行日/2002年1月29日

発行人/西澤 潤一

編集人/後藤 茂

社団法人 原子燃料政策研究会


〒100-0014 東京都千代田区永田町2丁目10番2号

(TBRビル303)

TEL 03 (3591) 2081

FAX 03 (3591) 2088

ホームページ  <http://www.cnfc.or.jp>

e-mail  pu-info@cnfc.or.jp

会 長

西澤 潤一 岩手県立大学学長
前東北大学総長

副会長

津島 雄二 衆議院議員

理 事 (五十音順)

今井 隆吉 元国連ジュネーブ軍縮会議
大使

江渡 聡徳 前衆議院議員

大 鷹 理 森 衆議院議員

大 嶋 章 宏 衆議院議員

後藤 茂 元衆議院議員

田名部 匡 省 参議院議員

向 坊 隆 元東京大学学長

山 本 有 二 衆議院議員

吉 田 之 久 前参議院議員

渡 辺 周 衆議院議員

印刷/アサヒビジネス株式会社

編集後記

❖ 2001年9月11日の同時多発無差別テロは、航空機の発達により世界中を自由に行き来できるようになった今日、国の防衛のあり方を再吟味させる事件となりました。テロ組織の壊滅は、21世紀の人類にとって不可欠の課題ですが、同時に、国同士の敵対、民族同士のいがみ合いなども無くさなくては、テロ問題の根本的な解決にはなりません。

❖ 世界中の人々が共存共栄する世界こそ、テロの心配のない平和な社会を形成する基盤であると思います。そのためには、経済支援を含めて、平和外交を隅々まで浸透させる必要があります。

❖ 第二次世界大戦以降、交通手段、通信手段の急速な発達などにより、大きな戦争、紛争

はなくなったとよく言われます。しかしまだ、そのような手段を自由に利用することができない、あるいは禁止している国々さえあります。そのような国々の国際化を図ることも21世紀の人類の課題でしょう。

❖ 持続的発展と地球環境保全が両立する原子力平和利用を進めるため、私ども原子燃料政策研究会は、わが国や世界各国に対してその必要性を理解していただくため、今後も積極的に原子力平和利用、そして核廃絶に関する情報を提供すると共に、多くの人々とのコミュニケーションを通して、共存共栄を図っていくこととします。今年も当会へのご協力をお願いいたします。